

331. 縄文時代の地域交流

－高島市弘川佃遺跡の調査成果より－

1. はじめに

ひろかわつくだ

弘川佃遺跡は、琵琶湖の北西岸、現在の高島市（旧今津町域）を流れる石田川の右岸に位置します。その場所は、饗庭野丘陵の北東側裾野にあたります。また、地形分類的には石田川によって形成された扇状地の扇端部で、後背湿地から扇状地・低位段丘にかわる変化点にあたります。この付近は、古代の北陸道と若狭路の分岐点もあり、周辺には古代の役所と関連する遺跡が集中しており、古くから交通の要衝であったことがうかがわれます。



図1 弘川佃遺跡調査位置



図2 弘川佃遺跡出土縄文土器

今回の発掘調査は、都市計画道路今津川線緊急地方道路整備事業に先立ち、平成16年度に4,842㎡を発掘調査しました。

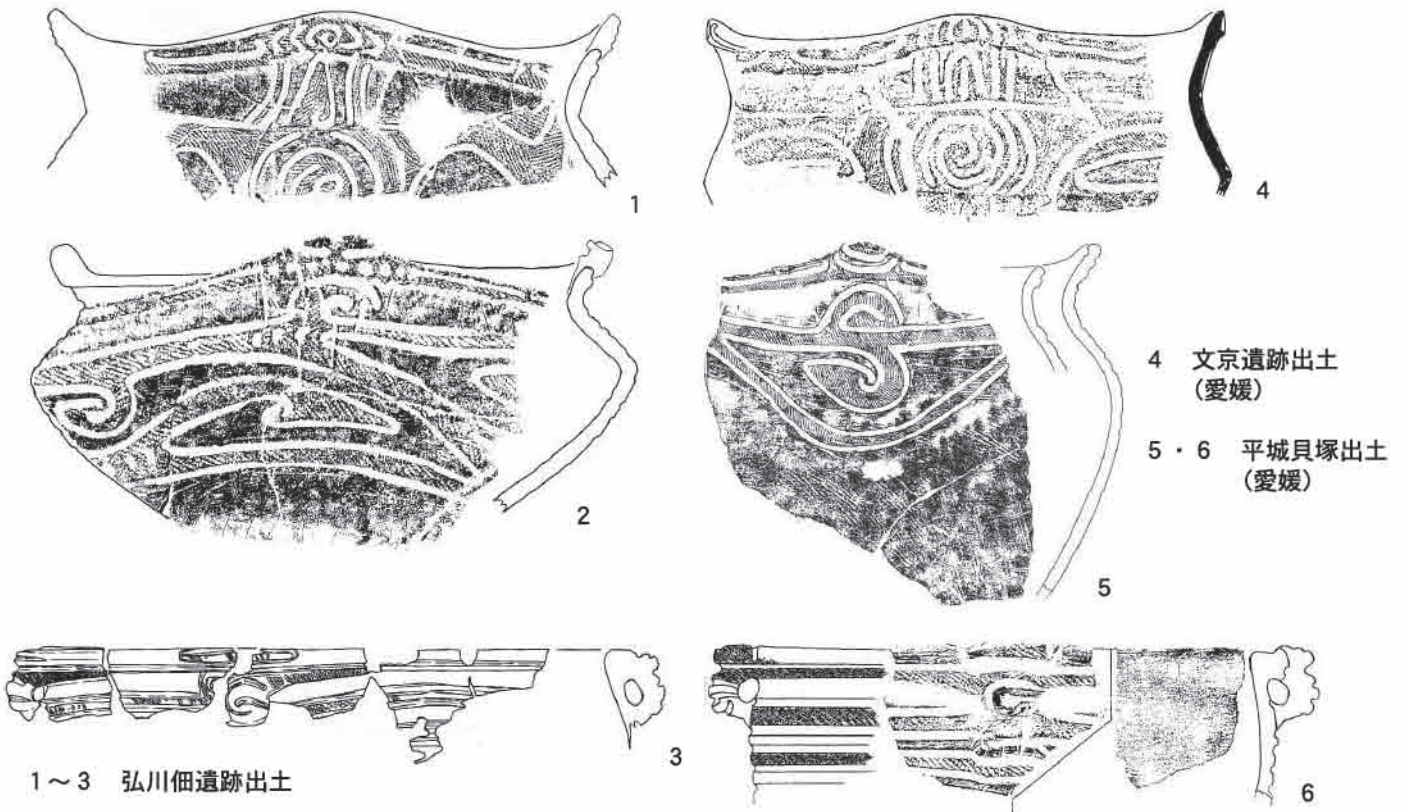
発掘調査では、縄文時代から室町時代にかけての遺構や遺物が出土し、長期にわたって集落が営まれていたことが判明しました。そのなかでも、非常に良好な遺存状態で検出された飛鳥時代の竪穴住居は、内部の構造が復元できる貴重な事例となりました。また、平安時代から室町時代にかけての掘立柱建物や土坑墓などがみつかりました。さらに、出土遺物の8割を占める縄文時代の土器や石器から、さまざまな情報が得られました。これらは、縄文時代後期の川跡から出土したもので、縄文土器は、九州東北地域や四国西南地域



図3 弘川佃遺跡出土土器（東北九州・南西四国系）



図5 推定される土器伝播ルート



1～3 弘川佃遺跡出土

図4 弘川佃遺跡出土土器とその相似土器

から搬入された土器や関東地方を中心とした東日本の土器の形態や文様構成の影響を受けた土器、内外面に赤色顔料が付着している土器の存在が明らかになりました。また、石器では頁岩製の多量の打製石斧とその破片が確認されました。ここでは、出土遺物から見える、縄文時代の生活についてふれていきたいと思えます。

2. 運ばれた土器

縄文土器は、一定の時期・地域において共通の器形や文様構成を示すことがわかっています。弘川佃遺跡から出土した土器は、縄文時代後期前葉（約3,700年前）の北白川上層式という近畿地方一円にみられる土器型式のものが主体です。しかし、その中であって、これらとは明らかに器形や文様構成が異なり、特殊な胎土を示す土器が存在しています。

◆西から来た土器

北白川上層式と異なる器形や文様構成を示す土器は、短く、明瞭に屈曲させる頸部を持ち、胴部中央が算盤玉状に屈曲する特徴を備えています。また、施文方法や調整法においても、縄文の縄目の単位が細かく、器壁を丁寧に磨き上げるなどの共通点を見出すことができます。そして、それらの特徴を持つ土器を探しますと、九州東北部地域（福岡～大分県）・四国南西部地域（愛媛県）の豊後水道を挟んだ両地域で出土する土器と非常に似ていることがわかりました。似た土器としては愛媛県文京遺跡、福岡県柏田遺跡、愛媛県平城貝塚、大分県小池原貝塚からの出土品をあげることができます。これらの土器は、中心地以外では日本海側に分布していることがわかっています。そのことから、日本海側の地域を経由して弘川佃遺跡に持ち込まれたと推定することができます（図5）。

◆黒い粒の入ったチョコレート色の土器

北白川上層式の土器には、チョコレート色をして、黒く光る粒が胎土中に認められる土器が、一定比率存在しています。この土器は、生駒山西麓に位置する東大阪市から八尾市、柏原市域でとれる粘土を使用したものと考えられています。弘川佃遺跡では、このチョコレート色で黒色の鉱物を含む胎土の土器が全体の約25%程度を占めます。ただし、その比率はどの器種においても同率ではなく、深鉢の特定形態のものに集中する傾向が認められることわかっています。このことは、粘土等の材料が移動していたとするより、むしろ土器そのものが移動していたと考えたほうが良いのかもしれない。しかし、この特徴的な粘土を使った

土器が、どのような目的・理由で運ばれてきたのかはわかっていません。

3. 赤色の土器

弘川佃遺跡で出土した土器中、27点に赤色顔料が付着していました。肉眼で赤色を示す顔料には、ベンガラ（酸化第二鉄）と水銀朱（硫化水銀）の2種類の可能性が高いことが知られています。弘川佃遺跡出土の土器もそのいずれかとみられたのですが、顔料の種類を肉眼では判別することが不可能なため、理化学的な分析により同定を行いました。その結果、15点中8点が水銀朱であることがわかりました。水銀朱の付着例でもっとも古いものは、奈良県宮の平遺跡や岐阜県塚遺跡出土品の中期末葉（約4,200年前）の例が知られており、後期初頭には徳島県などの水銀朱産地を中心に事例が増加します。弘川佃遺跡例は、現在判明している産地周辺地以外から出土する最古例に相当するものとなります。また、水銀朱が内面に付着している例や磨り面に水銀朱が付着している磨石などから水銀朱の加工・貯蔵等がおこなわれていたことが想像できます。



図6 弘川佃遺跡出土赤色顔料付着土器

4. 打製石斧の製作

弘川佃遺跡からは、143点もの主に頁岩製の打製石斧が出土しています。この出土量は、滋賀県内はもとより近畿地方においても京都府の桑飼下遺跡に次ぐ量です。そして、製品と思われるもの以外に頁岩の剥片等が大量に出土しています。このことは、弘川佃遺跡において打製石斧が作られていた可能性を示すものとして注目されます。

5. 弘川佃遺跡の地域での役割

今回の弘川佃遺跡の調査成果をまとめますと、①土器が遠くから運ばれてきていること、②水銀朱が加工・貯蔵されていたこと、③打製石斧が製作されていた可能性が高いことがわかりました。これらの事象は、当地が縄文時代後期前葉の流通の拠点であったことを示しているといえます。土器の移動は、日本海側の地域と近畿地方の内陸部との流通網を浮かび上がらせます。水銀朱や打製石斧の加工や製作は、自給自足の生活のみではなく特定製品の専門的な供給を想定させ、それを流通網に乗せるシステムが存在していた可能性が高いと考えられます。

湖西地域においては縄文時代の遺跡の実態がよくわかっていませんでしたが、今回の調査により、縄文時代の人々の生活の一面が具体的に明らかになりました。それは、古代以来において北陸道と若狭路が分岐する交通の要衝であるという地域の性格は、時代をはるかにさかのぼった縄文時代から受け継がれたもので、そして縄文時代の人々の生活が現在の私たちの生活に通

じるようなシステムを持っていたことがうかがわれるのです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 堀 真人)

この遺跡についての詳細は下記の発掘調査報告書をご覧ください。滋賀県内の図書館などで閲覧することができます。

- ・「弘川佃遺跡・弘川宮ノ下遺跡」『都市計画道路今津川線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2007

【引用・参考文献】

- ・『文京遺跡 8・9・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 愛媛大学考古研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990
- ・木村剛朗『四国西南沿岸部の先史文化』幡多埋文研 1995

写真提供：滋賀県教育委員会

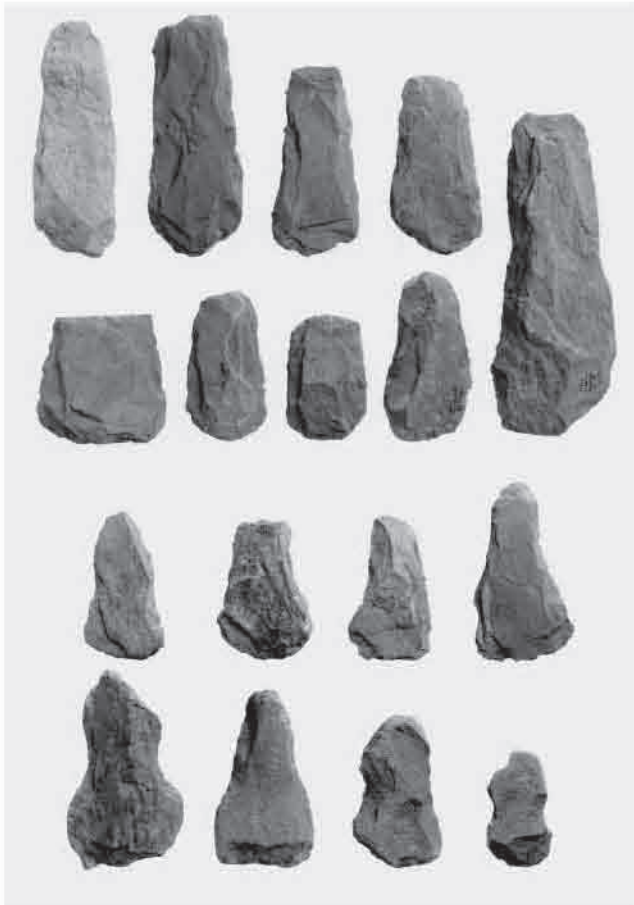


図7 弘川佃遺跡出土打製石斧



図8 弘川佃遺跡出土頁岩製打製石斧・剥片等